

謝莊の『春秋左氏經傳圖』

南澤, 良彦
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 准教授 : 中国思想

<https://doi.org/10.15017/10296>

出版情報 : 哲學年報. 67, pp.77-95, 2008-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

謝莊の『春秋左氏經傳圖』

南 澤 良 彦

序

私は先に論考「南朝の明堂について―謝莊の明堂歌を中心として―」において、中国南朝宋時代の人である謝莊（四二二〜四六六）を研究対象とし、主としてその明堂歌について検討を行った⁽¹⁾。その際、謝莊が作った、文学作品以外の、「作品」に言及した。すなわち『宋書』卷八十五列傳第四十五に収める謝莊の本傳巻首に

謝莊、字希逸、陳郡陽夏人、太常弘微子也。年七歳、能屬文、通論語。及長、韶令美容儀、太祖見而異之、謂尚書僕射殷景仁、領軍將軍劉湛曰、「藍田出玉、豈虚也哉。」初為始興王濬後軍法曹行參軍、轉太子舍人・廬陵王文學・太子洗馬・中舍人・廬陵王紹南中郎諮議參軍。又轉隨王誕後軍諮議、並領記室。

分左氏經傳、隨國立篇、製木方丈、圖山川土地、各有分理、離之則州別郡殊、合之則宇内為一。

（謝莊、字は希逸、陳郡陽夏の人、太常弘微の子なり。年七歳、能く文を屬つり、論語に通ず。長ずるに及び、韶令にして容儀美しく、太祖（宋・文帝）見て之を異とし、尚書僕射殷景仁、領軍將軍劉湛に謂ひて曰く、「藍田玉を出だす、豈に虚ならんや」と。初め始興王濬の後軍法曹行參軍と為り、太子舍人・廬陵王文學・太子洗馬・中舍人・廬陵王紹の南中郎諮議參軍に轉ず。又た隨王誕の後軍諮議に轉じ、並びに記室を領す。

左氏の經傳を分け、國に隨ひて篇を立て、木の方丈を製し、山川土地を圖し、各をの分理有り、之を離せば則ち州別れ郡殊なり、之を合せば則ち宇内一と為る。）

とある、その第二段落の「分左氏經傳、隨國立篇、製木方丈、圖山川土地、各有分理、離之則州別郡殊、合之則宇内為一。」という記述に着目したのである。

該論考では、「分左氏經傳、隨國立篇」で句点を打ち、二つの「作品」についての記述とした上で、「前者はいわば『左氏春秋傳國別本末』ともいうべきもの。後者は州郡単位で分離可能な木製の中國地圖に他ならない」と私は書いた。そして、『春秋左氏傳』を『春秋經』とともに国ごとに分けて再構成するという行為及び木製の地図を州郡別に筋目（切り目）を入れてバラバラにできまた再合体できるようにした、という点を捉えて、該論考の研究テーマであった「明堂歌」の分析と照らし合わせて、謝莊の「全体と個との相對關係、個の総体としての全体という思考様式を好む傾向」^③を指摘した。謝莊の研究を進めるにつれて、この結論には確信を深める一方であるが、右記の解釈には——二つの作品としたことを含めて——再検討の必要を感じるに至った。

本論考は、発明品といってよい謝莊の珍奇なる「作品」について、その本質を説明せんとするものである。

一 「分左氏經傳、隨國立篇」

「分左氏經傳、隨國立篇」という二句は、さきに私が解釈した通り、「いわば『左氏春秋傳國別本末』ともいうべきもの」を発明したことを述べていると思われる。本来編年体である『春秋』の經と傳とを国別に編集し直したものであるという推測である。『左氏春秋傳國別本末』なるネーミングは、清の高士奇が著した『左傳紀事本末』から着想した。一般に「紀事本末」自体は、南宋の袁枢の著『通鑑紀事本末』に始まると言われる。とすれば謝莊の「作品」は「紀

事本末体」の始まりを相当さかのぼらせることになる。この推定は正しいのであろうか。その当否を検討するためにまず、謝莊が生きた南朝宋時代における『春秋』関係の著作の状況を確認しておこう。次に引用するのは、『隋書』經籍志一經部春秋の項である。

- 1⁽⁴⁾ 春秋經十一卷【吳衛將軍士燮注⁽⁵⁾】
- 2 春秋左氏長經二十卷【漢侍中賈逵章句。】
- 3 春秋左氏解詁三十卷【賈逵撰。】
- 4 春秋左氏傳解詁三十一卷【漢九江太守服虔注。】
- 5 春秋左氏傳三十卷【王肅注。】
- 6 春秋左氏傳三十卷【董遇章句。】
- 7 春秋左氏傳義注十八卷【孫毓注。】
- 8 春秋左氏傳十二卷【魏司徒王朗撰。】
- 9 春秋左氏經傳集解三十卷【杜預撰。】
- 10 春秋杜氏、服氏注春秋左傳十卷【殘缺。】
- 11 春秋左氏傳音三卷【魏中散大夫嵇康撰。梁有服虔、杜預音三卷、魏高貴鄉公春秋左氏傳音三卷、曹耽音、尚書左人郎荀訥等音四卷、亡。】
- 12 春秋左氏傳音三卷【李軌撰。】
- 13 春秋左氏傳音三卷【徐邈撰。】
- 14 春秋釋訓一卷【賈逵撰。】

- 15 春秋左氏經傳朱墨列一卷【賈逵撰。】
- 16 春秋釋例十卷【漢公車徵士穎容撰。梁有春秋左氏傳條例九卷、漢大司農鄭眾撰。】
- 17 春秋左氏膏肓釋痾十卷【服虔撰。梁有春秋漢議駁二卷、服虔撰、亡。】
- 18 駁何氏漢議二卷【鄭玄撰。】
- 19 春秋成長說九卷【服虔撰。梁有春秋左氏達義一卷、漢司徒掾王玠撰、亡。】
- 20 春秋塞難三卷【服虔撰。梁有春秋雜議難五卷、漢少府孔融撰、春秋左氏釋駁一卷、王朗撰、亡。】
- 21 春秋說要十卷【魏樂平太守糜信撰。】
- 22 春秋釋例十五卷【杜預撰。梁有春秋釋例引序一卷、齊正員郎杜乾光撰、亡。】
- 23 春秋左氏傳評二卷【杜預撰。】
- 24 春秋條例十一卷【晉太尉劉寔撰。梁有春秋公羊達義三卷、劉寔撰、亡。】
- 25 春秋經例十二卷【晉方範撰。梁有春秋釋滯十卷、晉尚書左丞殷興撰、春秋釋難三卷、晉護軍范堅撰、亡。】
- 26 春秋左氏傳條例二十五卷
- 27 春秋義例十卷
- 28 春秋左傳例苑十九卷【梁有春秋經傳說例疑隱一卷、吳略撰、春秋左氏分野一卷、春秋十二公名一卷、鄭玄撰、亡。】
- 29 春秋左氏經傳通解四卷【王述之撰。】
- 30 春秋左氏傳賈、服異同略五卷【孫毓撰。】
- 31 春秋左氏函傳義十五卷【干寶撰。】
- 32 春秋左氏區別三十卷【宋尚書功論郎何始真撰。】

- 33 春秋文苑六卷
- 34 春秋叢林十二卷
- 35 春秋義林一卷
- 36 春秋大夫辭三卷
- 37 春秋嘉語六卷
- 38 春秋左氏諸大夫世譜十三卷
- 39 春秋五辯二卷【梁五經博士沈宏撰。】
- 40 春秋辯證六卷
- 41 春秋旨通十卷【王述之撰。】
- 42 春秋經傳解六卷【崔靈恩撰。】
- 43 春秋申先儒傳論十卷【崔靈恩撰。】
- 44 春秋左氏傳立義十卷【崔靈恩撰。】
- 45 劉寔等集解春秋序一卷
- 46 春秋序論二卷【干寶撰。】
- 47 春秋序一卷【賀道養注。】
- 48 春秋序一卷【崔靈恩撰。】
- 49 春秋序一卷【田元休注。】
- 50 春秋左傳杜預序集解一卷【劉炫注。】
- 51 春秋左氏經傳義略二十五卷【陳國子博士沈文阿撰。】

- 52 王元規續沈文阿春秋左氏傳義略十卷
- 53 春秋義略三十卷【陳右軍將軍張沖撰。】
- 54 春秋左氏義略八卷
- 55 春秋五十凡義疏二卷
- 56 春秋左氏傳述義四十卷【東京太學博士劉炫撰。】
- 57 春秋序義疏一卷【梁有春秋發題一卷、梁簡文帝撰、春秋左氏圖十卷、漢太子太傅嚴彭祖撰、古今春秋盟會地圖一卷。亡。】
- 58 春秋公羊傳十二卷【嚴彭祖撰。】
- 59 春秋公羊解詁十一卷【漢諫議大夫何休注。】
- 60 春秋公羊經傳十三卷【晉散騎常侍王愆期注。梁有春秋公羊傳十二卷、晉河南太守高龍注、春秋公羊傳十四卷、孔衍集解、春秋公羊音、李軌、晉徵士江淳撰、各一卷。】
- 61 春秋繁露十七卷【漢膠西相董仲舒撰。】
- 62 春秋決事十卷【董仲舒撰。】
- 63 春秋決疑論一卷
- 64 春秋左氏膏肓十卷【何休撰。】
- 65 春秋穀梁廢疾三卷【何休撰。】
- 66 春秋漢議十三卷【何休撰。】
- 67 駁何氏漢議二卷【鄭玄撰。梁有漢議駁二卷、服虔撰、亡。】
- 68 駁何氏漢議敘一卷

- 69 春秋公羊墨守十四卷【何休撰。】
- 70 春秋公羊例序五卷【刁氏撰。】
- 71 春秋公羊諡例一卷【何休撰。梁有春秋公羊傳條例一卷、何休撰、春秋公羊傳問答五卷、荀爽問、魏安平太守徐欽答、春秋公羊論二卷、晉車騎將軍庾翼問、王愆期答。亡。】
- 72 春秋公羊解序一卷【鮮于公撰。】
- 73 春秋公羊疏十二卷
- 74 春秋穀梁傳十三卷【吳僕射唐固注。梁有春秋穀梁傳十五卷、漢諫議大夫尹更始撰、亡。】
- 75 春秋穀梁傳十二卷【魏樂平太守麴信注。〔樂平〕原作「平樂」。按、魏書地形志無平樂郡、有樂平郡。今據改。】
- 76 穀梁傳十卷【晉堂邑太守張靖注。梁有春秋穀梁傳十三卷、晉給事郎徐乾注、春秋穀梁傳十卷、胡訥集解。亡。】
- 77 春秋穀梁傳十六卷【程闡撰。】
- 78 春秋穀梁傳十四卷【孔衍撰。】
- 79 春秋穀梁傳十二卷【徐邈撰。】
- 80 春秋穀梁傳十四卷【段肅注、疑漢人。】
- 81 春秋穀梁傳五卷【孔君楷訓、殘缺。梁十四卷。】
- 82 春秋穀梁傳十二卷【范甯集解。梁有穀梁音一卷、亡。】
- 83 春秋穀梁傳四卷【殘缺、張、程、孫、劉四家集解。】
- 84 麴信理何氏漢議二卷【魏人撰。】
- 85 春秋穀梁傳義十卷【徐邈撰。】

- 86 春秋議十卷【何休撰。】
- 87 徐邈答春秋穀梁義三卷
- 88 薄叔玄問穀梁義二卷【梁四卷。】
- 89 春秋穀梁傳例一卷【范寧撰。】
- 90 春秋公羊、穀梁傳十二卷【晉博士劉兆撰。】
- 91 春秋穀梁廢疾三卷【何休撰、鄭玄釋、張靖箋。】
- 92 春秋公羊、穀梁二傳評三卷
- 93 春秋三家經本訓詁十二卷【賈逵撰。宋有三家經二卷、亡。】
- 94 春秋三傳論十卷【魏大長秋韓益撰。】
- 95 春秋經合三傳十卷【潘叔度撰。】
- 96 春秋成奪十卷【潘叔度撰。】
- 97 春秋三傳評十卷【胡訥撰。梁有春秋集三師難三卷、春秋集三傳經解十卷、胡訥撰。今亡。】
- 98 春秋土地名三卷【晉裴秀客京相璠等撰。】
- 99 春秋外傳國語二十卷【賈逵注。】
- 100 春秋外傳國語二十一卷【虞翻注。】
- 101 春秋外傳章句一卷【王肅撰。梁二十二卷。】
- 102 春秋外傳國語二十二卷【韋昭注。】
- 103 春秋外傳國語二十卷【晉五經博士孔晁注。】
- 104 春秋外傳國語二十一卷【唐固注。梁有春秋古今盟會地圖一卷、亡。】

右九十七部、九百八十三卷。【通計亡書、合二百三十部、一千一百九十二卷。】

春秋者、魯史策書之名。昔成周微弱、典章淪廢、魯以周公之故、遺制尚存。仲尼因其舊史、裁而正之、或婉而成章、以存大順、或直書其事、以示首惡。故有求名而亡、欲蓋而彰、亂臣賊子、於是大懼。其所褒貶、不可具書、皆口授弟子。弟子退而異說、左丘明恐失其真、乃為之傳。遭秦滅學、口說尚存。漢初、有公羊、穀梁、鄒氏、夾氏、四家並行。王莽之亂、鄒氏無師、夾氏亡。

初齊人胡毋子都、傳公羊春秋、授東海嬴公。嬴公授東海孟卿、孟卿授魯人眭孟、眭孟授東海嚴彭祖、魯人顏安樂。故後漢公羊有嚴氏、顏氏之學、與穀梁三家並立。漢末、何休又作公羊解說。

而左氏、漢初出於張蒼之家、本無傳者。至文帝時、梁太傅賈誼為訓詁、授趙人貫公。其後劉歆典校經籍、考而正之、欲立於學、諸儒莫應。至建武中、尚書令韓歆請立而未行。時陳元最明左傳、又上書訟之。於是乃以魏郡李封為左氏博士。後羣儒蔽固者、數廷爭之。及封卒、遂罷。然諸儒傳左氏者甚眾。永平中、能為左氏者、擢高第為講郎。其後賈逵、服虔並為訓解。至魏、遂行於世。晉時、杜預又為經傳集解。穀梁范甯注、公羊何休注、左氏服虔、杜預注、俱立國學。然公羊、穀梁、但試讀文、而不能通其義。後學三傳通講、而左氏唯傳服義。至隋、杜氏盛行、服義及公羊、穀梁浸微、今殆無師說。

（春秋なる者は、魯史策書の名なり。昔成周微弱し、典章淪廢し、魯周公の故を以て、遺制尚ほ存す。仲尼其の舊史に因りて、裁して之を正す、或いは婉にして章を成し、以て大順を存し、或いは其の事を直書して、以て首惡を示す。故に名を求めて亡び、蓋はんと欲して彰はれ、亂臣賊子、是に於いて大いに懼る。其の褒貶する所、具さに書すべからず、皆弟子に口授す。弟子退きて説を異にし、左丘明其の真を失ふことを恐れ、乃ち之が傳を為くる。秦の學を滅ぼすに遭ふに、口説尚ほ存す。漢初、公羊・穀梁・鄒氏・夾氏有り、四家並び行はる。王莽の亂ありて、鄒氏師無く、夾氏亡ぶ。初め齊人胡毋子都、公羊春秋を傳へ、東海嬴公に授く。嬴公東海孟卿に授

け、孟卿魯人眭孟に授け、眭孟東海嚴彭祖・魯人顔安樂に授く。故に後漢公羊に嚴氏・顔氏の學有り、穀梁と三家並び立つ。漢末、何休又公羊解説を作る。

而して左氏、漢初張蒼の家より出で、本傳無き者なり。文帝の時に至り、梁の太傅賈誼訓詁を為し、趙人貫公に授く。其の後劉歆典校經籍、考えて之を正し、學に立てんと欲するに、諸儒應ずる無し。建武中に至り、尚書令韓歆立てんことを請ひて未だ行はれず。時に陳元最も左傳に明るく、又上書して之を訟ふ。是に於いて乃ち魏郡李封を以て左氏博士と成す。後羣儒蔽固なる者、數しば之を廷争す。封の卒するに及び、遂に罷る。然るに諸儒の左氏を傳ふる者甚はだ眾し。永平中、能く左氏を為さむる者、高第を擢らんで講郎と為す。其の後賈逵・服虔並びに訓解を為くる。魏に至り、遂に世に行わる。晉の時、杜預又た經傳集解を為くる。穀梁范甯注・公羊何休注・左氏服虔・杜預注、俱に國學に立てらる。然るに公羊・穀梁、但だ試みに文を讀むも、而れども其の義に通ずる能たはず。後學三傳通講せらるも、左氏唯だ服の義を傳ふるのみ。隋に至り、杜氏盛行し、服義及び公羊・穀梁浸やく微となり、今殆ど師説無し。

一読了解されるように、謝莊の『左氏經傳隨國立篇』（仮称）に関する記事はなく、「紀事本末体」の著作も見当たらない。99〜104番の『春秋外傳國語』はそれに類するように見えるが、いわゆる『春秋外傳國語』は『左氏傳』と同じく左丘明の著とされ、『春秋外傳』の名が示すように『春秋左氏傳』（内傳）と関連深いものの別の書物である。

西晉時代に杜預（二二二〜二八四）が『春秋經』と『左氏傳』とを年ごとに合体させ注解を施した9『春秋左氏經傳集解』三十卷を作製したことが端的に示すように、南朝宋時代には春秋関係の著作の傾向は分離よりむしろ総合の方向にあったのである。

尤も別の見方をすれば、『春秋左氏經傳集解』の登場は、単行していた經書である『春秋經』を年ごとに切り離し

てその間に「傳」に過ぎない『左氏傳』の該当年の記事を挿入するという行為が公認されたということに他ならない。すなわち『春秋經』はもはや一字一句その構造までもゆるがせにできないスミズミにまで孔子の技巧が施された聖典でなく、缺を入れてバラバラにしてもよい史料になったことを意味するのだ。また、『春秋左氏經傳集解』受容の積極さは時代思潮の、総合への指向性、と同時に、総合の前にいったん分離・分割を行うことにはばからない果敢さをも見て取れる。謝莊の「作品」へさほどの逕庭はないのである。

二 「製木方丈、圖山川土地、各有分理、離之則州別郡殊、合之則宇内為一」

謝莊の「作品」についての記述の後半部分「製木方丈、圖山川土地、各有分理、離之則州別郡殊、合之則宇内為一」の意味するところは明確である。一丈四方（方丈）の木で製作され、自然の地形（山川）及び行政区域（土地）が描かれた、切れ目（分理）を入れて、州郡単位にばらしたり、くっつけて天下世界を出現させてみたりできる立体地図のことを言っているのである。中国古代・中世に於いて一丈は二く三メートルほどの長さだから、巨大とは言えないが、けっして小さくはない。描かれた地形などの情報量も少なくはなかったに違いない。実に魅力的な地図を謝莊は発明したものである。

問題はこの後半部分と右に見た前半部分すなわち『左氏經傳隨國立篇』（仮称）とはどのような繋がりののかということだ。『左氏經傳隨國立篇』（仮称）が書物であることは疑問の余地が無い。また右の解釈通り後半部分「木方丈圖」（仮称）が木製の中国全土地図であることも明白である。「州別郡殊」だから州と郡とが行政区域の呼称だった時代の地図だとしたら、謝莊の生きた南朝宋時代のそれとするのが妥当であろうが、国単位で語られる春秋時代も周代の名残を考慮に入れば州・郡で境界線を引けぬことはなく、謝莊の「木方丈圖」（仮称）が『左氏經傳隨國立篇』（仮称）を直接反映したものと推定することも蓋然性は高いのである。

『春秋』と地図とは接点を持っている。右の『隋書』經籍志一の著録で57『春秋序義疏』の原注に「春秋左氏圖十卷、漢太子傅嚴彭祖撰。古今春秋盟會地圖一卷。亡。」とあるのに注目されたい。また98『春秋土地名三卷』【晉裴秀客京相璠等撰。】とあるのにも注意を払うべきである。ちなみに杜預にも著録された9『春秋左氏經傳集解』・22『春秋釋例』十五卷・23『春秋左氏傳評』二卷の他に「春秋」関係では『盟會圖』と『春秋長曆』との二つの著作があったことが『晉書』卷三十四杜預列傳に見える。⁶⁾

『春秋左氏圖』の「圖」が「圖書」なのか、「地圖」なのか判然としないが、そもそも「圖書」の語と「地圖」の語との関係自体判然としない。「圖書」「圖籍」の範疇に「地圖」は含まれ、しかも相当重要なポジションを占めるようである。そのことは98『春秋土地名』にも著者のパトロンとして名があがる晉の裴秀（二三三〜二七一）の本傳（『晉書』卷三十五裴秀列傳）に

秀儒學洽聞、且留心政事、當禪代之際、總納言之要、其所裁當、禮無違者。又以職在地官、以禹貢山川地名、從來久遠、多有變易。後世說者或強牽引、漸以闇昧。於是甄擿舊文、疑者則闕、古有名而今無者、皆隨事注列、作禹貢地域圖十八篇、奏之、藏於祕府。其序曰、

圖書之設、由來尚矣。自古立象垂制、而賴其用。三代置其官、國史掌厥職。暨漢屠咸陽、丞相蕭何盡收秦之圖籍。今祕書既無古之地圖、又無蕭何所得、惟有漢氏輿地及括地諸雜圖。各不設分率、又不考正準望、亦不備載名山大川。雖有粗形、皆不精審、不可依據。或荒外迂誕之言、不合事實、於義無取。

大晉龍興、混一六合、以清宇宙、始於庸蜀、采入其岨。文皇帝乃命有司、撰訪吳蜀地圖。蜀土既定、六軍所經、地域遠近、山川險易、征路迂直、校驗圖記、罔或有差。今上考禹貢山海川流、原隰陂澤、古之九州、及今之十六州、郡國縣邑、疆界鄉鄙、及古國盟會舊名、水陸徑路、為地圖十八篇。

制圖之體有六焉。一曰分率、所以辨廣輪之度也。二曰準望、所以正彼此之體也。三曰道里、所以定所由之數也。

四曰高下、五曰方邪、六曰迂直、此三者各因地而制宜、所以校夷險之異也。有圖象而無分率、則無以審遠近之差、有分率而無準望、雖得之於一隅、必失之於他方、有準望而無道里、則施於山海絕隔之地、不能以相通、有道里而無高下、方邪、迂直之校、則徑路之數必與遠近之實相違、失準望之正矣、故以此六者參而考之。然遠近之實定於分率、彼此之實定於道里、〔晉書斟注、藝文類聚六引〕「然」下有「後」字、「彼此之實」下有「定於準望、徑路之實」八字、當據補。按、初學記五引同類聚。〕度數之實定於高下、方邪、迂直之算。故雖有峻山鉅海之隔、絕域殊方之迴、登降詭曲之因、皆可得舉而定者。準望之法既正、則曲直遠近無所隱其形也。

(裴) 秀儒學洽聞にして、且つ心を政事に留む。禪代の際に當り、納言の要を總べ、其の裁當する所、禮に違ふ者無し。又た以えらく職地官に在り、禹貢の山川地名、從來久遠なるを以て、變易有ること多し。後世の説者或いは牽引を強め、漸く以て闇昧なり。是に於いて舊文を甄擿し、疑ふ者は則ち闕き、古名有りて今無き者、皆隨事注列して、禹貢地域圖十八篇を作り、之を奏して、祕府に藏せらる。其の序に曰く、

圖書の設くるる、由來や尚し。古より象を立て制を垂れ、其の用に頼む。三代其の官を置き、國史厥の職を掌る。漢咸陽を屠るに暨び、丞相蕭何盡ごとく秦の圖籍を收む。今祕書既に古の地圖無く、又た蕭何の得る所無く、惟だ漢氏の輿地及び括地諸雜圖有るのみ。各分率を設けず、又た正準望を考えず、亦た備さに名山大川を載せず。粗形有りと雖も、皆精審せず、依據すべからず。或荒外迂誕の言、事實に合わず、義に於て取る無し。

大晉龍興し、六合を混一し、以て宇宙を清め、庸蜀より始め、采して其の岨に入る。文皇帝乃ち有司に命じ、吳蜀の地圖を撰訪す。蜀土既に定まり、六軍經る所、地域の遠近、山川の險易、征路の迂直、圖記を校驗し、或いは差有る罔し。今上(晉・武帝)禹貢の山海川流、原隰陂澤、古の九州、及び今の十六州、郡國の縣邑、疆界の鄉陬、及び古國盟會の舊名、水陸の徑路を考え、地圖十八篇と為す。

制圖の體に六有り。一に曰く分率、廣輪の度を辨ずる所以なり。二に曰く準望、彼此の體を正す所以なり。三

に曰く道里、由る所の數を定むる所以なり。四に曰く高下、五に曰く方邪、六に曰く迂直、此の三者各をの地に因りて宜を制し、夷險の異を校する所以なり。圖象有りて分率無ければ、則ち以て遠近の差を審らかにする無し、分率有りて準望無ければ、之を一隅に得と雖も、必ず之を他方に失ふ、準望有りて道里無ければ、則ち山海絶隔の地に施すも、以て相ひ通ずる能はず、道里有りて高下・方邪・迂直の校無ければ、則ち徑路の數必ず遠近の實と相ひ違ひ、準望の正を失へり、故に此の六者を以て參じて之を考ふ。然る後遠近の實分率に定まり、彼此の實準望に定まり、徑路の實道里に定まり、度數の實高下・方邪・迂直の算に定まる。故に峻山鉅海の隔・絶域殊方の迴・登降詭曲の因有りと雖も、皆擧げて定むる者を得べし。準望の法既に正しければ、則ち曲直遠近其の形を隱す所無きなり。

とあることから分かる。

ところでこの裴秀の文章（『禹貢地域圖』序）は示唆に富む。「制圖之體有六焉。一曰分率、所以辨廣輪之度也。二曰準望、所以正彼此之體也。三曰道里、所以定所由之數也。四曰高下、五曰方邪、六曰迂直、此三者各因地而制宜、所以校夷險之異也。」の箇所は、精密な地圖製作上の六つの重大なる基本原則を説いており、今日の研究者たちが一様に、科学的地圖制作（技術）者として裴秀を高く評価する結果を招来している。^⑦

研究者の指摘するように、^⑧裴秀の活躍した三國西晉時代以降、地理学がめざましい発展を遂げたことは、『隋書』經籍志二史部地理類の書目も雄弁にもの語る。そして一百三十九部、一千四百三十二卷に及ぶ書名を列挙したあと後序では次のように述べる。

昔者先王之化民也、以五方土地、風氣所生、剛柔輕重、飲食衣服、各有其性、不可遷變。是故疆理天下、物其

土宜、知其利害、達其志而通其欲、齊其政而修其教。故曰廣谷大川異制、人居其間異俗。書錄禹別九州、定其山川、分其圻界、條其物產、辨其貢賦、斯之謂也。周則夏官司險、掌建九州之圖、周知山林川澤之阻、達其道路。地官誦訓、掌方志以詔觀事、以知地俗。春官保章、以星土辨九州之地、所封之域、以觀祿祥。夏官職方、〔夏官職方 按、〔夏〕原作「秋」、據周禮改。〕掌天下之圖地、辨四夷八蠻九貉五戎六狄之人、與其財用九穀六畜之數、周知利害、辨九州之國、使同其貫。司徒掌邦之土地之圖、與其人民之教、以佐王擾邦國、周知九州之域、廣輪之數、辨其山林川澤丘陵墳衍原隰之名物、及土會之法。然則其事分在眾職、而冢宰掌建邦之六典、實總其事。太史以典逆冢宰之治、其書蓋亦總為史官之職。漢初、蕭何得秦圖書、故知天下要害。後又得山海經、相傳以為夏禹所記。武帝時、計書既上太史、郡國地志、固亦在焉。而史遷所記、但述河渠而已。其後劉向略言地域、丞相張禹使屬朱貢條記風俗、班固因之作地理志。其州國郡縣山川夷險時俗之異、經星之分、風氣所生、區域之廣、戶口之數、各有攸絃、與古禹貢・周官所記相埒。是後載筆之士、管窺末學、不能及遠、但記州郡之名而已。

晉世、摯虞依禹貢、周官、作畿服經、其州郡及縣分野封略事業、國邑山陵水泉、鄉亭城道里土田、民物風俗、先賢舊好、靡不具悉、凡一百七十卷、今亡。而學者因其經歷、並有記載、然不能成一家之體。

齊時、陵澄聚一百六十家之說、依其前後遠近、編而為部、謂之地理書。任昉又增陸澄之書八十四家、謂之地記。陳時、顧野王抄撰眾家之言、作輿地志。隋大業中、普詔天下諸郡、條其風俗物產地圖、上于尚書。故隋代有諸郡物產土俗記一百五十一卷、區宇圖志一百二十九卷、諸州圖經集一百卷。其餘記注甚眾。今任、陸二家所記之內而又別行者、各錄在其書之上、自餘次之於下、以備地理之記焉。

（昔者先王之民を化するや、以らく五方の土地、風氣の生ずる所、剛柔輕重、飲食衣服、各をの其の性有り、遷變すべからず。是の故に天下を疆理するに、其の土宜を物し、其の利害を知り、其の志に達して其の欲に通じ、其の政を齊しくして其の教を修む。故に曰く「廣谷大川制を異にし、人其の間に居り俗を異にす」と。『書』に

禹九州を別し、其の山川を定め、其の圻界を分かち、其の物産を條し、其の貢賦を辨ずるを録するは、斯れの謂ひなり。周は則ち夏官司險、九州の圖を建て、山林川澤の阻を周知し、其の道路に達するを掌る。地官誦訓、方志を掌り以て觀事を詔し、以て地俗を知る。春官保章、星土を以て九州の地・封ずる所の域を辨じ、以て祿祥を觀る。夏官職方、天下の圖地を掌り、四夷八蠻九貉五戎六狄の人と其の財用九穀六畜の數とを辨じ、利害を周知し、九州の國を辨じ、其の貫を同じからしむ。司徒邦の土地の圖と其の人民の教とを掌り、以て王の邦國を擾するを佐し、九州の域・廣輪の數を周知し、其の山林川澤丘陵墳衍原隰の名物及び土會の法を辨ず。然らば則ち其の事分かれて眾職に在りて、冢宰建邦の六典を掌り、實に其の事を總ぶ。太史以て冢宰の治を典逆し、其の書蓋し亦た總て史官の職為り。漢初、蕭何秦の圖書を得、故に天下の要害を知る。後又山海經を得、相傳へて以て夏禹の記する所と為す。武帝の時、計書既に太史に上げ、郡國の地志、固より亦在り焉。而るに史遷記する所、但河渠を述ぶるのみ。其の後劉向略ぼ地域を言ひ、丞相張禹屬の朱貢をして風俗を條記せしめ、班固之に因りて地理志を作る。其の州國郡縣山川夷險時俗の異、經星の分、風氣生ずる所、區域の廣、戸口の數、各をの敍する攸有り、古の禹貢・周官の記する所と相ひ埒す。是の後載筆の士、管窺末學、遠に及ぶ能はず、但州郡の名を記するのみ。

晉の世、摯虞禹貢・周官に依り、畿服經を作り、其の州郡及び縣の分野封略事業、國邑山陵水泉、鄉亭城道里土田、民物風俗、先賢舊好、具悉せざる靡し、凡そ一百七十卷、今亡ぶ。而るに學者其の經歷に因り、並びに記載有り、然るに一家の體を成す能はず。

齊の時、陵澄一百六十家の説を聚め、其の前後遠近に依り、編んで部と為し、之を地理書と謂ふ。任昉又陸澄の書に八十四家を増し、之を地記と謂ふ。陳の時、顧野王眾家之言を抄撰し、輿地志を作る。隋の大業中、普ねく天下の諸郡に詔して、其の風俗物産の地圖を條し、尚書に上す。故に隋代に諸郡物産土俗記一百五十一卷・區

宇圖志一百二十九卷・諸州圖經集一百卷有り。其の餘記注甚はだ厭し。今任・陸二家記する所の内にして又別行する者、各をの録して其の書の上に在り、自餘は之を下に次し、以て地理の記に備えん。

『隋書』經籍志には、裴秀の『禹貢地域圖』は著録されていない。しかしながら、同じ『隋書』の卷六十八宇文愷列傳には「裴秀輿地、以二寸為千里。」と断片的なデータが残存する。また、隋の虞世南『北堂書鈔』卷九十六藝文部二圖九には「地域圖」（原注「裴秀地域圖云、上考禹貢山海原隰及今之郡邑、疆界為地域圖十八篇。」）の項目の直後に「方丈圖」という項目があつて、注に引く『晉諸公贊』に「司空裴秀以舊天下大圖、用縑八十疋、省視既難、事又不審、乃裁減為方丈圖。以一分為十里、一寸為百里、從率數計里、備載名山都邑、王者可不下堂而知四方也。」とある。これはきわめて重大な記事である。

『方丈圖』とは実に興味深い代物であると指摘しておこう。研究者は「裴秀はまた、旧来の『天下大図』が大きすぎ、絹八十四匹にも及び、閲覧に不便であり、記載も不正確であつたため、その欠点を改正し、『一分を十里となし、一寸を百里となす』¹：1800000。中国の一里は古来均しく一八〇丈である。（後略）」縮尺を用いて、方丈図——一丈四方の図を作製した。図には「名山都邑を欠くところなく載せ」「王者が堂から下りなくても、四方のことを知ることができようようにし」たと解釈する¹⁰。どうやら裴秀の『禹貢地域圖』（『輿地（圖）』）は「二分を十里となし、一寸を百里となす」（もしくは二寸を千里となす）¹¹方丈図——一丈四方の図であつたようなのだ。

裴秀の『方丈圖』『禹貢地域圖』は、疑いの余地なく謝莊の「作品」を説明するきわめて重要な手掛かりである。裴秀が（皇帝の命を受けて）「禹貢の山海川流、原隰陂澤、古の九州、及び今の十六州、郡國の縣邑、疆界の郷陬、及び古國盟會の舊名、水陸の徑路を考え、地圖十八篇と為」（裴秀『禹貢地域圖』序）したのにな^なに倣つて、謝莊は『春秋左氏經傳』を国ごとに編集し直し、そこから得られた知識に基づいて、地形や行政区分の境界線を描いた（或は想

像をたくましくすれば、春秋盟會の故地なども克明に記されていたであろうと思われる。木製の地図を作製したのである。裴秀の『方丈圖』が正しく一八〇万分の一の縮尺であるなら、謝莊の「木方丈圖」（仮称）もおそらく同縮尺であつたに違いない。

結語

謝莊の「作品」の本質はほぼ解明できた。「分左氏經傳、隨國立篇、製木方丈、圖山川土地、」とは、西晉時代から顕著になってきた『春秋』『左氏傳』を經典としてでなく、史料として扱うトレンドに乗り、春秋時代の諸国の歴史を国別に再構成するという劃期的な創意工夫を行い、そこに記載された自然の地形・領地のかたちを、方丈という大型の木板の上に詳細に描いた精密な地図を製作したということなのだ。このことはここまでの検証作業で明らかにできた。ただ未だよく分からないのは「各有分理、離之則州別郡殊、合之則宇内為一」というところである。文意は明快である。「行政区分の境界に沿って切れ目を入れて、分離すれば州・郡ごとにばらばらになり、合体させれば天下世界は統一される」ということだ。そのことは誰にでも分かる。私に判断がつかないのはその動機である。南朝と北朝との分裂という深刻な時代背景を踏まえて、天下統一への切なる願いがこのような凝った地図を作る動機だった、と結論づければ一応は得心が行く。だが、「明堂歌」の検討で、謝莊のひとすじなわけではないか性格や過剰なまでの遊戯への志向を知っているが故に、むしろばらばらにできることそのもの、すなわち地図がジグソーパズルになることを発見したことに對する純粋な驚きや喜び、ジグソーパズル遊戯それ自体の面白さ、こちらこそが謝莊の本当の動機に思えて仕方がないのである。とはいえ、懸案であつた、謝莊の「作品」の本質の解明にはほぼ成功した。ということはとりもなおさず本論考の所期の目的は達成されたのである。

注

- (1) 南澤良彦「南朝の明堂について——謝莊の明堂歌を中心として——」(平成一四〇一六年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 課題番号一四三一〇〇〇九、研究代表者 宇佐美文理『六朝隋唐精神史の研究』研究成果報告書(論考篇)、平成一七年三月)。
- (2) 前掲論文一〇五頁。
- (3) 同右。
- (4) 通し番号は、興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(汲古書院、一九九五年)のものを使用する。
- (5) 【】内は原注、以下同じ。
- (6) 『晉書』卷三十四杜預列傳「預身不跨馬、射不穿札、而每任大事、輒居將率之列。結交接物、恭而有禮、問無所隱、誨人不倦、敏於事而慎於言。既立功之後、從容無事、乃耽思經籍、為春秋左氏經傳集解。又參攷眾家譜第、謂之釋例。又作盟會圖、春秋長曆、備成一家之學、比老乃成。又撰女記讚。當時論者謂預文義質直、世人未之重、唯祕書監摯虞賞之、曰、『左丘明本為春秋作傳、而左傳遂自孤行。釋例本為傳設、而所發明何但左傳、故亦孤行。』時王濟解相馬、又甚愛之、而和嶠頗聚斂、預常稱『濟有馬癖、嶠有錢癖。武帝聞之、謂預曰、『卿有何癖。』對曰、『臣有左傳癖。』」
- (7) ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』(思索社、一九七六年)第六卷「地の科学」第22章「地理学と地図学」五〇〇〜五二頁、杜石然・范楚玉・陳美東・金秋鵬・周世徳・曹婉如『中国科学技术史』(東京大学出版会、一九九七年)第5章5「地学の新しい進展」二二九〜二四〇頁を参照。
- (8) 杜石然他前掲書二三八頁以降。
- (9) 『隋書』經籍志原文の挙げる数字。実数は、一百三十八部、一千四百二十八卷。(興膳・川合前掲書四三八頁)
- (10) 杜石然他前掲書二二九頁。
- (11) 一寸を百里とするか二寸を千里(つまり一寸五百里)とするかは相当大きな相違だから、曹婉如「裴秀」(『中国古代科学家傳記』、科学出版社、北京、一九九二年)は『禹貢地域圖』十八篇は『方丈圖』でなく、一寸百里の縮尺の『方丈圖』を「底圖」として二寸千里の縮尺に縮小したものと推定する。